

虫の聲聞きつゝあれば向つ峯に月は寂けく浮び出でたり

奉祝歌

田川惠良

神垣に御代安かれと祈るこそ我が國民の誠なりけれ
大君の御代をし禱る神桓や豊葦原は浦安の國

和みゆく日の御光を浴びつゝも興亞奉公日に汗を流せり
天地のみことかしくみ祈りけりさかゆる國の年な迎へて
淺月夜ほのかに香ふ梅園にひとりし佇てば心ふるへぬ

雜詠

鈴木美成

こぞ逝きし母を思へば薄野の露けきなかに虫の聲する
寂かなる麓路ゆけば山川の流れがくたく十五夜の月
端居して庭にむかへば草むらにとりどりに鳴く秋虫の聲
石切場に眞夏目てれば繋つかふゆゝしき肩の肉付きを見つ
すだれ取る秋も來にけりこの年も無爲に過しと思ふ我かも

ないけれど、今、年老いた母親は何人かの子の母であるところのその子の爲にあらゆる看護の努力を續けてゐる。母にしてみればこの年になつてもまだ親に心配を掛ける親の氣持に對しても石にかぢりついても必ず病魔を克復せねばならない。祖母にすれば病床に苦しむ我が子の爲に、或は幼ない孫達が無心に遊びたはむれてゐる様を見るにつけても、どうかしてきつとなほしてやらねばならない、年老いた母に看られるその子、不治の病にある子を見る、その母親私はこの祖母と母、看る者看られる者、相互の心中を思ふても腸をえじられる様な苦痛を感じずには居られなかつた。

それから三月に入ると祖母の献身的看護の甲斐もあつて母はしばらく起きて歩ける位にまでなつてゐた。祖母も安心して歸郷されたのだつた。

併しこうゆう状態も長くは續かなかつた五月の半ば頃になつて急に病勢は悪化していつた。長い病床生活は母の体をしてすっかり衰弱させ、加ふるに餘病を併發するに